

[成果情報名]クランベリーの短期栽培法

[要約]これまで栽培期間が2～3年必要であったクランベリーを1年で安定して生産する栽培方法を確立した。さし木は春、仕上げ鉢に直接複数さす。徒長防止と着花促進のため植調剤を8月下旬に処理し、授粉にセイヨウミツバチを用いる。

[担当]総農セ・高冷地分場・岳麓試験地・外川高雄

[分類]技術・普及

[課題の要請元]

富士・東部農務事務所（旧南都留農業改良普及センター）

[背景・ねらい]

クランベリーは、販売品目の少ない6～9月に出荷でき、また、冬期の暖房代も少ないことから有望な品目である。しかし、栽培期間が2年以上かかり、開花・結実が不安定なことが問題となっていた。そこで、栽培期間を短縮し、結実を安定させる栽培方法を確立する。

[成果の内容・特徴]

- 1．さし木の発根率が高いため、仕上げ鉢に直接7～10cmのさし穂を複数本さし木すると、その年の秋には鉢を枝葉が被覆する。さし木本数の目安は3.5号鉢で5本、4.5号鉢で7本である（表1）。
- 2．ツツジ科の伸長抑制に登録のあるバクロブトラゾールを8月下旬に処理すると無処理に比べ4～6倍の花数を着けることができる（表2）。
- 3．授粉のためにセイヨウミツバチを利用すると結実率が向上する（データ略）。
- 4．施肥はさし木1ヶ月後から開始し、45日間隔で用土1リットルあたりIB化成4gを施用する（表3）。
- 5．この栽培は概ね標高850m以下の地域が適している（表4）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．低温には強いが乾燥に弱いため、冬期露地および無加温の場合は、用土を乾燥させないように注意する。
- 2．最終ピンチは植調剤処理の2週間前とする。標高が低い場所では1～2週間ほど遅くともよい。
- 3．さし穂用の親株は露地でも加温室内でもその後の生育に差はない。生育期間を確保するため、遅くとも4月中にさし木を行う。

[期待される効果]

- 1．鉢花農家において出荷する品目の少ない6～9月に有利に販売できる新たな品目として普及され、経営の向上が期待できる。

[具体的データ]

表1 鉢の大きさとさし木本数が生育に及ぼす影響

鉢 サイズ	さし木数 (本)	被覆度	生存株率 (%)	鉢 サイズ	さし木数 (本)	被覆度	生存株率 (%)
3.5号	5	5.0	98	4.5号	5	4.1	100
	7	5.0	97		7	5.0	97
	10	4.9	91		10	5.0	96

さし木：平成15年3月25日 調査：平成15年9月10日

被覆度：鉢上面を枝葉が覆っている割合 3：41～60% 4：61～80% 5：81～100%

表2 植調剤の処理が開花・結実に及ぼす影響

処理日	開花日 (月/日)	総花数 (輪/鉢)	結実数 (個/鉢)
8/25	3/24	164	23.3
9/7	3/31	124	20.7
9/20	4/4	87	18.8
無処理	4/16	30	4.5

さし木：平成16年3月25日 3.5号鉢5本さし

授粉：放任

表3 施肥量が生育に及ぼす影響

施肥量 (g)	最長枝長 (cm)	枯死株率 (%)
2	48.7	0
4	58.3	2
6	58.7	8

施肥量：用土1リットル当たりI B化成(N-P₂O₅-K₂O 10-10-10)の量

さし木：平成16年4月26日 3.5号鉢5本さし 調査：平成16年7月25日

表4 栽培場所が生育・開花・結実に及ぼす影響

栽培場所	標高	枝数 (本)	開花数 (輪)	結実数 (個)	秀品率 (%)
中央市	(350m)	52.7	175.9	34.3	90
富士吉田市	(820m)	55.5	177.2	41.9	95
鳴沢村	(1000m)	80.8	125.3	12.3	0

さし木：平成18年3月26日 3.5号鉢5本さし 植調剤処理：平成18年8月25日

秀品率：鉢当たり20個以上結実している鉢の割合

[その他]

研究課題名：観賞用小果実鉢物の栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2003～2007年度